

一本化における

壱岐観光概念

私達の島には大手が介入するような需要も無く、商社戦争とかは無縁な場所です。そんな商才が合わないところで我々は商いをなぜするのでしょうか。

都会に行けば無限のチャンスもあるはずですが。

それは生まれながらとか、何らかの理由でそこに住んでいるからですが、大きな理由は郷土を愛しているからでしょう。

しかし壱岐には生活する為の仕事は限られ、ほとんどの人がやむなく都会に出ます。言ってみれば適正人口しか住めないのは仕方が無い事です。

それは自然の流れですが、適正人口で良いと言う考えは間違いです。島に住むからには少しでも島を豊かにし、誇れる壱岐にする義務があるのです。

皆様はそれを守るため交流人口を増やしても、需要を増やそうとされている訳です。今はむしろ観光業者以外の人の方が観光は大切と叫ばれているくらいです。

そして国でさえ地方は第一産業か観光しか無いと言い切っています。

それに答えないのは私達観光業者と行政なのはどうしてでしょうか。それぞれ努力しているとは思いますがバラバラで、本気なのかと疑いたくなります。その大きな原因は行政にも業者にも基本的なビジョンがないからです。

特にこれからの地方行政に運営能力と企業努力が無いところは、未来が無いのは誰もが解りきっているはずですが。

一本化を成し遂げ、その大革命が感じられないのは一番寂しいことです。

文中に「協働」と言う言葉を良く使っていますが、
協働とは住民と市（国、県）がお互いに尊重し合い地域の為に共に働き
地域を良くすると言う事だそうです。

平成 19 年 9 月 22 日

壱岐観光協会 会員

田口 靖人

〒811-5202 長崎県壱岐市石田町筒城仲触 1786

Tel 0920-44-5818 Fax 0920-44-5686

ビジョンがなぜ必要なのか

物を始めるときに企画書が要ります、企画書とは細かい所まで明記します。

しかし企画書の前に必要なのがビジョンではないでしょうか。

ビジョンの無い企画書では視野が狭く他の企画との連携がありません。

その結果、何をしても目先ばかり追う結果になりがちです。

今日までの努力が実らないのはそれが成されていなかったからではないでしょうか。

例えば離島振興法で当時からビジョンを持って、海岸の埋め立てとか道路の整備が成されていたらと思えば、時代がそうさせたにせよ残念でたまりません。

その過程を振り返れば、二度と同じ事をしないのが人間です。

しかしそれを繰り返すのは解りません、自分の金でするならそんな事はしないはずです。

それもこれもビジョンが無いからではないでしょうか。

壱岐市では首長がビジョンを持つべきです、そして住民の企画をビジョンの基で他の企画と連携し修正して、壱岐全体を企画するのが理想です。

今はそれが出来る首長を育てるか、探し出すのが住民の義務ではないでしょうか。

これからはそれが出来る地域と出来ない地域では大きな格差が生じます。

沈没するか、栄光の道を歩くかの緊迫した時期との危機感を感じるべきです。

壱岐の観光

観光とは、誰にも身近な事ですが、観光とは何かと問えばそれぞれ答えが違います。さすが 30 年前のように「女さえ置けば客が来る」など言う人はいないようです。

「カジノさえ作れば良い」と言う馬力のある声も聞こえなくなりました。

そのように観光は自分の好きな観光を自由に選べますが、それを業とすれば違います。業として受ける側の観光で考えるなら、まず最大公約数的目的の選択とか地域への影響などを配慮し、その他無限の難しさになります。

そこまで考えず、自分の選ぶ観光で考え誰もが無意識にプロとってしまうのです。その為いろんな意見が飛び変わり、まとまりが付かずビジョンなど存在しません。

しかしどんな専門家でも観光の方向付けを断言出来る者はいないと思います。

観光は定義付け出来ないような生き物でもあるのです。

使用側の観光は要望論とお考え下さい。

観光論とはその要望論を参考にした受け入れ側の立場で論じるべきです。

そしてそれにはビジョンが必要なのも大切です。

どんな良いアイデアでも時代と流行に消される事もあります。

時代と流行を感じながら本物趣向を守るとしか言いようがありません。

壱岐ではまさにその基本である本物趣向が正解ではないでしょうか。

その本物も外から見た魅力ある地域を作りあげる事ではないでしょうか。

その大きなビジョンの基で、いろんな企画を連携させてこそ完成するのです。

日本人の観光理念

日本の文化は世界にも範とされる部分があります。
食文化においては、魚を全く無視した西洋が今や見習って魚を称えます。
しかしリゾート文化では、これと反対で西洋にはかきません。
西洋ではリゾートする為に一年を働くとする位、保養を大切にしています。
日本人は勤勉で仕事が趣味とする位、働いてきました。
それを法律で休暇を取ると、法律で決めたのがリゾート法です。
今こそ土日祭日と休日が増えるのに慣れてしまいましたが、何年前は無理やり休みを取ると、言わなければ休まない働き国民だったので。
リゾート（保養）等は、とても理解できる土壌ではなかったのです。
リゾート法が制定され多くの休日を与えられました、その休日を過ごせる場所を提供するものに援助しますと保養地を求めたのも、リゾート法です。
しかしリゾート法はなぜか完全に保養から離れた法案となり非難を浴びました。
それは日本人がまだリゾートに馴染んでいなかったからです。

「リゾート壱岐」

リゾートの理想は地中海クラブと思います。
1960年代にはリゾート村を100万人の会員を持つ地中海クラブが作っていました。
保養の為に一ヶ月程度なら快適に過ごせる地域を造った訳です。
普通では存在する地域がそのように変貌して行くのが普通ですが、
会員の力でその理想郷を新たに何も無い、適地に造った訳です。
欧米のリゾートはそれほど社会に浸透しているのです。
しかし日本には会員にまでなっていない、リゾートする習慣はありません。
お金もさることながら暇も無いはずですが。
しかしそのような時代が訪れようとしているのは確かです。
そこに総合保養地整備法が現れたので、まさに保養村の助け舟と思ったのです。
日本では集まらない会員の力の代わりに、国の趣旨が取って代わると思いました。
しかしそれは保養村とは違う、バブルイベントのみの援助でした。
バブル崩壊にならずとも、見事その法案は破れました。
しかしこれで国民の保養を無視する事は出来ません、今度は慎重に大義名分に合った本物趣向の保養地を、国民のために模索する義務が国には残されているはずですが。
その実験例として地域振興策程度の宿舍整備を芽とし、枝葉を付け自然に大きな保養の木となり、村になるディスクの少ない企画を提案する事は、協働につながると信じます。
私たちは農漁業と違って土農工商の名残か、同じ離島の零細宿屋でありながら、
離島の補助の恩恵を今まで全く受けてないのです。
国民の保養を受け持つと言う、大義名分の基で国との協働を願ってみたいものです。

その窓口は壱岐市です、市に願えるのは私達の観光協会なのです。
そのようにこれからの観光協会は市と協働できるレベルに育つ事が大切です。
壱岐市も窓口になるくらいの事はしてくれるでしょう。
なぜなら本物趣向の保養村は観光整備から見ても、最高の目玉となるからです。
保養地が理解できない方は、別にそれにこだわらず整備のための手段とお考え下さい。

近年の日本人のリゾート感覚

近年確実に日本人はリゾートをこなせる感覚が備わってきております。
最近お客様が「楽しかった、又一年がんばってまいります」と表現されます。
連泊が多くなり朝出かけられ夕食間際まであちこち行かれ楽しめます。
そして二三泊されても、もう少し居たかったと言われるお客様が多くなりました。
これはまさに日本人がリゾート文化に馴染んだ兆候と確信します。
いわゆるリゾート壱岐の確信の裏が取れた気が致します。

リゾート壱岐

リゾート（保養）は国民を健全な心に導き、これからの社会を担う子供の性格形成に重要な役割を担います、それはこれからの日本に一番必要な空間なのです。
その役割の条件を備えた所はそう多くはありません。
壱岐はその要素を有し、交通の便もよい島である事は最高の誉れです。
そして観光とは地域そのものです、総ての産業が健康をテーマに地域造りが出来ます。
食の安全、予防医学と考えると壱岐、丸ごとがリゾートと関連をもち栄えます。
今合併によりそれが出来る日本一幸せな国と成ったはずです。

公共事業には終わりがあがる物です、それでも工事のために工事をする最悪の常態がまだ存在するという事は言いようの無いむなし物です。
工事のためでなく自立のための工事は細くとも永遠に続く事でしょう。
そしてその生きた工事こそ自立できる地域に導くのです。
別紙に「こんな島にして欲しい」にはその概案を用意いたしております。
その裏付けを取り具体的な企画書造りを作成する事でこの工事が始まります。
特例債は各たる自立のためにのみ使うべきです。
そのような工事こそ生きた工事ではないでしょうか。

観光の現況

海外旅行とかテレビ報道で日本人の観光感覚は欧米以上の感覚へとエスカレートされていきます、それに答えるには並大抵の物では有りません。
離島ブームも終わりました、夏さえ顧客が減っています、まさに忘れ去られた壱岐です。
しかしテレビ放映での、やらせの観光に飽きた本物趣向の顧客が年々増えております。

それを後押ししたのはインターネットです。

本格趣向を目指す観光には救いの神と言っても良いくらいです。

何もテレビとかの話題にならなくとも自分の信念のやり方を表現すれば、誰かがインターネットで探し当て訪れてくるのです。

そうなる今までの宣伝のやり方とは全然違ってきます。

今までは宣伝々と店も作らず宣伝をするような事さえしていました。

これからは素晴らしい事さえすれば、必ず伝わる時代です。

壱岐の宣伝が足りない、イベントで客を呼ぶとかの前にする事があります。

受け入れ態勢重視論です、来たくなるような壱岐にする。

それさえすれば必ず顧客に伝わるのです、そして壱岐が注目されたら今より貴方のしている事もチャンスが広がるのです。

ネットで目に触れるとすれば貴方の店の前に「壱岐」が検索されるのです。

「壱岐」が検索される事で貴方の店もクリックされる回数が増えるのです。

貴方の店は企業努力で出来ます、「壱岐」は個人では出来ません。

私達が集まっても出来ません、行政と協働して始めて出来ます。

今壱岐は何をなすべきか

ピジョンなき観光論は折角の名案でも迷路に誘い込みます。

リゾート壱岐を語らずとも、壱岐の観光の売りは島であるはずで。

地域には山も文化もありますが最高の目玉は島であり海なのです。

日本国民が一番リゾートするのは夏季であるのも事実です。

その時期に顧客の注目はディズニーランド以上「海」に目が向きます。

そして離島ブームが訪れましたがそれを波に乗せる事無く終わりました。

それは「夏は黙っていても客は来る」とあなどったからです。

夏季整備は何十年と放置状態でイベントとか文化を売る事に目が奪われました。

それは間違いではありませんが本業の夏を怠慢にしたのは大きな誤りです。

夏季対策は完全に顧客のニーズから離れています。

そして紫外線による海水浴の減少は年々進むでしょう、そのような時代を想定し原点に戻り本業である夏季の整備を最重視すべきです。

その危機感を感じ得ないのは内からの壱岐しか考えないピジョンなき理論からです。まず今壱岐観光は原点に戻り、外からの壱岐を考える時ではないでしょうか。

個人客に耐ええる観光地を目指そう。

夏季以外の顧客勧誘は旅行社が募集したツアー客がほとんどです。

それは個人客のニーズに合った受け皿が出来てない証です。

それだけの魅力が無く、ただ海水浴レベルで見られているのです。

だから夏だけの観光から脱皮どころか、夏さえ減少しています。
その上国民の住宅事情とか観光ニーズは非常に高まり欧米に追いつきました。
しかし壱岐では宿舎も地域整備も昔のままで進化いたしておりません。
これは「夏は黙っても来る」と思い込が原因です。
このままでは夏季でさえ下降を続け、観光は適正店舗のみしか残れないでしょう。
行政はそれを避けるための義務があります。
しかし行政は調整した企画は出来てもビジョンある企画の体質ではありません。
そこで観光協会こそビジョンを出せる体質に成長するべきです。
そして行政と協働する事が理想の道であり、そうあるべき事です。
その意味から行政任せになるような観光強化の法人化は避けるべきです。
もし法人化するとすれば行政の役割（委託事業）を法人化するのはありうるでしょう。
参議院と衆議員との関係のように提案は庶民から否決は行政とあるべきで、
ここでそのような役割を明確にする事が合理的ではないでしょうか。
今までは行政が民間レベルを語り行政の仕事を語らぬ状態が見受けられます。
観光協会の一本化も各町観光協会と連合した協会も同じような関係です。
現場(各町)の発想を援助して壱岐の発展にリンクするような行為で統一を計るのです。
そして一本化した意見にまとめ参議院(行政)に提出するのです。
昔の町村会方式を参考にすれば迷わず一本化になるでしょう。
そして誰にでも入れる観光協会会費にするべきです。
行政との役割分担で今のような無理はしなくてもやれるはずです。
入会出来ないように会費が高い観光協会では公平性はなく一部の観光協会です。
皆で尊重し合い話せるようなテーマ、行政に提出できるようなビジョン作成、
皆の共通の悩みを皆で守るそんな観光協会であるべきと思います。

具体的に絞った事業

外から見た意見書に壱岐観光でA級なのは錦浜から筒城浜の海岸線とされています。
内からの意見ではいろんな物があるのは事実ですが夏季の目玉は海が売りなのです。
それに続く辰の島は壱岐最後の自然の砦です。
そして海にちなんだ海水浴、磯遊びイルカはオプションの目玉です。
これらを当初からビジョンを持って取り掛かっていたら今頃はリゾート壱岐の基礎が
出来たと断言できるくらいです。
離島観光には呼び水が必要です、ポンプに呼び水を入れれば後は承知の通りです。
呼び水とはある程度までの基礎であり、その基礎が立派なら自立出来るのです。
基礎が立派でもその効果がなければ住民が怠慢であると言えます。
その基礎が何かを見極めるにはやはり外から見た壱岐を考える事ではないでしょうか。
今からでは遅すぎますが、原点に帰りその基礎を作らぬ限り自立出来る観光時代は

訪れません、そして何時までも裏作観光からの脱皮が出来ないでしょう。
そして一番大切なのは未来を見据えたビジョンを考えるべきです。
具体的に言えば必要な物を作る時それだけの目的を考えず、全体の未来を考えた企画と
関連付け、「言わば夢のような」と言える位でなければ観光の基礎にはなりません。

筒城浜、辰の島、いるか池整備

まずは金が無いとかは別問題です、未来ビジョンで都市計画的構想の作成が重要です。
この整備は壱岐観光の効果が一番明確にあがる事業です。
スタンスの高い視野からの見解をお考え願いたいものです。
あまりにも無頓着な企画には、むなしさを感じております。
自然を保護開発しなければならぬ海岸線に船に見合わない漁港を作り。
ある意味では地域の魅力を半減してしまいました。
資産評価 100 億のダイヤに傷をいれて無価値にしてしまったのと同じです。
それも縦割り行政の盲点です、水産課が漁港を作るのは当たり前です。
農林課が砂防を作るのも当たり前です。
公園課は公園として企画するのも当たり前です。
そこには総合図面も無く施主さえ存在しないばらばらの施主無き工事となる訳です。
これは工事が悪いのではなく施主（住民）が悪いのです。
こうしてくれと施主の意見を言える組織を育てないからです。
公共事業は個人では動きません、それを司る住民団体の育成が必要です。
そして総括した地域造りを願うべきではないでしょうか。
これも協働とつながると思います。
この事でどれだけの有効な利用計画が生じるか計り知れません。
法は守るためにありますが、道理の通るものを守る為にも法があるのです。
正しい事が法のため妨げられる法は時代に合わせて改善するべきです。
この事は総ての地域開発にも共通する事ではないでしょうか。
筒城浜整備も辰の島、いるか池も別紙で記しております。

行政と民間の観光役割

この役割分担を明記する事で鶏と卵論は解決するでしょう。
各々の役割を果たせば良い訳です。
行政の役割は住民の指導と援助、そして住民では出来ない庶務とか工事を司る事です。
そして住民の意見を尊重し審議し、国との窓口になる事です。
民間の役割は民意を集結し行政に提案できるような団体を作る事。
そして自分自身の発展が郷土の発展とつながる事です。
自分が良くなれば壱岐も良くなる、そして壱岐が良くなれば自分も良くなるとの関連あ

る努力をするべきではないでしょうか。

それが出来ない行為は小さな壱岐には不向きなのです。

簡単にまとめれば行政の役割は住民が提案した物を審査し実行する。

住民は地域のため発案し行政と協働する事です。

その為の条件は住民団体のレベルがそれに相応しくなければなりません。

自立するための財源はどうか。

地方分権とは自立と権利の移行です。

一本化は飽と言われた特例債を目当てにする行為は如何なものでしょうか。

その上特例債を身支度金に使うとすれば一本化の意味がありません。

特例債はやがて自立しなければいけないときの準備に使うべきです。

地方交付金は減少されても、あと何年かは四町分程度が支給されるはずで。

身支度には地方交付金でまかなえる身支度をするべきです。

そして一本化して市になった権限は主張するべきです。

法令上の手続きができてないとしても権限は主張し法改善を早急にするべきです。

私達の島は私たちが施主となり、権限は守るべきです。

国が親とすれば県は兄貴です、兄貴が弟の幸せを願うのは当然ではないでしょうか。

国は「これからはこうしたいからこうしてくれと言うようであればいけない」と優しい言葉をかけています。

それなら一本化はそれを示すのが一番重要な一つではないでしょうか。

「こうしたいから」は「壱岐を国民の健康を守る島にして国と協働したい」と言う

「こうしてくれ」は「その為保養地の認定をして欲しい」と言う

認定後は壱岐の才覚だけで財源を出してくれと言う。

無駄金をせびる悪たれ息子より、喜んでくれるはずではなからうか。

市はその企画書と裏づけ調査する位の予算を惜しむべきではないはずで。

ビジョンを示し住民に元気を呼び起こさせるには必要な行為ではないでしょうか。

住民は苦しくとも明るい未来があれば耐える事が出来ます。

国とか行政への希望を多く書きました、しかしそれは皆が言う「行政に頼るな」ではなく、「行政と協働して」地域そして日本を良くしようとの提言です。

今まではくれたものをもらう習性でしたが、地方分権は自立でもあります、国が言うように「こうしたいからこうしてくれ」と言う事は、むしろ胸を張れる行為だと思います。

観光の良さは観光が成り立つ一定の交流人口が訪れて始めて効果が見えてきます。

今はそれには達してないから目には見えませんが、それが達成された時には想像以上の成果があがるのを、誰もが感じる事が出来ると思います。

まずは採算の取れやすい夏を基礎にした基本計画

前章で述べましたように外から見た現状を考えてみたいと思います。
内からみると歴史文化の優れた部分を重視されるのは間違いでは有りませんが、島である壱岐は外から見て何を連想するでしょうか、壱岐は島、そして海がきれいな所と壱岐を知らない人でも、一度行って見たいと願望されるでしょう。
その為に「一度は行って見たいところ」の統計で一位を占めたこともあります。
歴史文化は訪れてからの価値観です、まずは来させるには中の者で無く外の人が期待する海の整備が先ではないでしょうか。
確かに歴史文化で訪れる人もいるでしょうが、その比率は比べ物にならないでしょう。
それから比べれば「夏の受け入れ整備」は壱岐観光の基礎であり軸なのです。
一本化で一番にしなければならぬ重要な課題です。
しかし誤解しないで下さい、これから語ることは大きなビジョンです。
バラバラの方向にいかないように、先の先を考える目標とお考え下さい。
そのビジョンのもとで出来る事から始めれば良いのです。
そうする事で一つの筋が通り、大きな目的にたどり着くのです。
夢のようなとは批判しないで下さい、ビジョンとは夢を抱かねば描けません。
その夢に向かい皆で希望を持ちたいものです。

これから述べます当計画案は

製作日（H15年3月）「こんな島にして欲しい」から部分的に表示した物です。

石田町・保養地重点地区の役割

石田町は恵まれた故の「空気論」。身近すぎ、良さを生かし切れなかったと思います。
故横山孝雄氏の描かれたリゾート案が継続されなかったのが残念です。
筒城浜は横山孝雄氏が背後地の購入計画をなされたお陰で存在しているのです。
筒城浜を石田町だけの宝でなく壱岐の宝と訴えてきました。
壱岐観光の最大公約数的目玉でありながらその良さを生かしきっていないと思います。
当地が正常に整備されていたら、壱岐の観光はワンランク上の観光地のステップを踏む基礎が出来上がり、今内から見た観光整備も生きた物になったでしょう。
今までの努力が実らないのは、基礎が無い家を建てたのと同じだと思います。
それに首を傾げられた方々の責任です、何と言っても経過が事実を語っております。
そのビジョンなき発言と行為に対する責任は、重過ぎるくらい重い物です。
私は勝本出身で有りながら、当地に住み着いてそれを証明しています。
それを筒城浜に住んでいるからと評価する位のレベルでは話になりません。
どのコンサルタントもA級の観光資源と賞賛しているのです。
勝本の親戚はなぜ勝本に来なかったのと不思議がりましたが、筒城浜の整備ができて

初めて壱岐が観光のスタートを切ると自信満々に語ったのはその為です。

それが済めば勝本に帰り、次は辰の島と、その時は純粹に思い自信さえありました。都会で通用した自信は見事に打ち砕かれ 30 年唱える計画は何も出来ませんでした。

しかし憧れの一本化の時代が来た今こそ、一步踏み込めるかと期待しております。しかし時代は今、辰の島ブームです、いるか池も含めて同時進行が必要と考えます。筒城浜、辰の島にこだわらず、壱岐を売り出すにはそれらが必要なのです。

保養地の条件

1、立地条件

筒城浜を筆頭に七浜を有し、国選水浴八十八選にも認定された南向きの温厚な海岸線は最適の保養地としての要素を有します。

顧客としてアクセス一時間から三時間ぐらいで可能な都市部を福岡、北九州、久留米と南は宮崎、東は広島と言った顧客を有し、最適の保養地の条件を備えています。

2、海の魅力

海の魅力は夏季の見直しで述べたように夏泳ぎに行くと言う習慣はディズニーランドに優るほどの大きなイベントです。夏は採算の取れる十分な可能性がある訳です。

この市場を考えれば夏型の保養型リゾートの整備に対する採算効果は成り立ちます。壱岐の一番大切な夏場の観光整備を助ける事になります。都市計画に添った自然的発生を論じましたが、今の観光衰退のためにも一番に取り組べき事業であります。

3、島内における交通アクセス

島内の観光アクセスはまったく無に等しい状態です。

需要と供給の原理、お客さえ増えればその対策は容易でしょうが今では無理です。

採算が取れなくとも波及効果のある案が考えられる必要があります。

レンタカーはシーズンの時は不足しますが増やすにはシーズ外は利用者がいない。

観光地をアクセスする定期的路線を組むには採算が取れない。

このような問題を誰かが考えるべきではないでしょうか。

フェリー運賃の改善も大きな解決法と思いますが、誰の役目でしょうか。

私達の熱意を集め行政に願うのも、行政は自主的に行なうもどちらも不足のようです。

4、重点地区内道路と取り付道路

道路及び下水道は地域造りの基本であります。

絵を描くのにキャンバスが要るのと同じです、キャンバス無しで絵は描けません。

保養型リゾートの分担として、重点地区の道路、下水道、公園整備、等の基礎工事は行政の役割になりますがそれは郡内事業としても必要な事です。

良いキャンパスを用意する事で保養村への民間参加が生じ、そこに素晴らしい滞在型の理想の村が描かれるのです。

このキャンパスを造るのが国民の為の保養地として、行政の大きな役割なのです。壮大すぎると思われる方もいらっしゃると思いますがここまで考えるのが都市計画ではないでしょうか。そのビジョンに少しずつ近づく事が必要です。

5、海岸保養道路は最大の目玉

海岸保養道路は壱岐の魅力を示す最善のセレモニーと思います。港を降り海も見えない道を通り宿に着くのと、美しい海岸通りに魅せられて宿に着くのは大きな違いであります。また来客にドライブでも勧め、自然の海の魅力をお見せ出来る事は、壱岐の資産価値は百倍に成ると言えるほど最大の目玉です。

もし壱岐が早くに一本化であれば実現していたと一番悔まれます。今日では至難の事業でしょう。

しかし「海岸保養道路」となればそのチャンスは大であります。岸保養道路こそ壱岐に取りまして最も重要な投資的公共事業で有ります。自立を促す意味での稼げる道路だからです。

自然破壊を避けた工法で「自然を見せる為の癒しの道」を作るのです。自然を大切に、むしろ自然を保護しながらの道路作りであるのは必然です。それも現在では一度に出来るような時代ではありません、重点地区を整備する事から始めれば良いのです、その後の道路は時代に合わせ必要な延長が考えられるのです。

6、重要地域の電柱の排除

近郊都市の保養地として、自然と電柱ほどアンバランスは無いでしょう。都会でさえもはや電柱など地下に通す時代であり、電柱は自然を売りとする壱岐としては「ホウキを置いた客間に客を通す」気さえ致します。

重用地区は新たな夢の都市計画が出来る空間でもあります。その中だけでも電柱は排除したいものです。

7、マラソンコースの整備

現在歩く事や走る事は健康法として誰もが重視しています。国民の健康に対する意識は益々高く成るようです。すでに日常的に習慣付けた人も大変増加傾向です。保養地としてその整備を備えるのは基礎的行為と思われれます。

潮風のなかでのジョギングは身も心も癒され、タラソセラピーの醍醐味でも有ります。筒城浜は観光客だけでなく島内にもその雰囲気を楽しむ人が増えております。郡体のマラソンコースの指定も受けた地域でも有り、コースの整備が必要です。

例を示せば福岡の大濠公園マラソン道路を紹介いたします。

8、防波堤の自然石による自然化

壱岐は自然豊かと言われて来ましたが、その豊かな自然も生活優先とされた公共事業により破壊され、景勝地に於いても生活優先で出来た堤防は、今やその地区の景勝を阻害している状態が生じてあります。有名な評論家が何年も前に「これからの公共事業は作りすぎた堤防を取り払う事だ」と述べていましたがまさにその通であります。

その防波堤を自然石で囲み造園化し、自然を復活させる考えです。

自然はそのままが良いと学者が言います、しかし手を加える個所も必要なのです。それは皆様の庭に雑草をはやすのでなく、庭造りをするのと同様なのです。

9、椿公園（四季の花）の建設

島の椿は有名と語り継がれていますが、その姿は手軽に見ることが出来ません。自然の島と言われながら自然美の存在さえ危ぶまれる状態では自然は保護の時代です。「壱岐は自然の島、全体が公園」と言う人ほど自然破壊を気にも留めないようです。

その自然を復活して身近に活用出来る公園を造ると考えてみて下さい。

重点地域にはその雰囲気が必要です。重点地区の生け花としての椿公園です。小規模ながらも四季の樹木と花を称えた椿公園を整備する事は、観光客は勿論島内の住民のためにも価値ある取り組みでないでしょうか。

10、近郊都市の福利厚生としての設備

近郊都市の福利厚生を担う保養村としては、これら顧客の要望を良く調査し満足させる設備を備える事で参加利用者が増えます。

現在都会ではスポーツランドは日常の感化で素晴らしい環境が出来ております。その為同じ様な事では興味が注がれないでしょう。

島である島らしい取組が必要と思われれます。

その一つとしてタラソテラピーは島に相応しい取組と思います。

自然と融合した設備が出来るのは、島の個性です。

それを生かしさえすれば、壱岐の将来はこの上なき価値観がでると思います。

11、保養地と郡内医療との連携（タラソテラピー、リハビリ）

保養地としての機能にテラピーは欠かせない物と考えます。

現在は保養の時間を取る事さえ危ぶまれる不透明な時代では、保養からテラピー（療養）と移行する時代性でもあります。

その為には医療との連携の下で計画を随行する必要性が生じて来ます。

この場合のテラピーとは予防を中心に考え、軽度のリハビリ並びに心理的健康を中心に行われる物であります。その為には島内医療の連携も重要と成ります。

12、タラソセラピー

欧州と日本における海と健康の歴史

「夏海水浴に行くと、風邪を引きにくくなる」といわれるように、海の持つ健康増進効果は古くから認知されていた。また、「皮膚病は海に入ればなおる」といわれるように、海の持つ治療効果も古くから認知されていた。欧州では、かの古代ギリシャ医学の祖であるヒポクラテスが海水を治療に用いたとの記録が残されている。

海辺の気候と海水を様々な手法を用いて積極的に健康増進や美容、そして機能回復(リハビリテーション)や治療目的で活用する、気候医学療法の一つに位置付けされる。1960年にフランス医学アカデミーでは「海洋性気候作用のなかで、海水、海藻、海泥を用いて行う治療」と定義し、1961年にフランス厚生省は「医学的監視のもとで海水、海の空気、海の気候を組み合わせる治療効果目的で利用するもの」としている。

平成七年度厚生科学研究補助金健康増進研究事業「健康づくりのための休養手法の開発に関する研究・報告書」では、海岸療法として「海水、海の空気、海の気候を組み合わせた保健効果を治療目的に利用」することとしている。

適応症には、腰痛、関節症から代謝・循環器・皮膚疾患などがあり、温泉療法と類似している。フランスでは最近の利用傾向として健康増進目的が多く、その他に美容(エステティック)、痩身を目的とした利用に人気があり、一人平均六日間の滞在期間が中心となっている。タラソセラピー(海岸療法)では温めた海水を用い、その物理的効果(温熱、浮力、水圧など)、科学的効果(海水、海藻の成分によるもの)、脱ストレス(転地、気候、環境の変化による)などの作用を医学的効果に利用している。

財団法人海洋健康科学財団

出口 宝

昭和大学小児科教授

飯倉 洋治

琉球大学医学部名誉教授

小張 一峰

日本医事新報 No3917 1999年5月22日に掲載

※文中医学的、専門的な解説は長文のためはぶいております。

13、店舗宿泊地区への出店

保養村では宿舎店舗のバランスが発展の鍵を担います。

観光セクションの元で設けられた規制地域に民間希望者の店舗出店が出来ます。

その参加により重点地区の形成が成り立つのです。

そこには計画された規制がありますが指導と援助もともないます。

そこには新しい仕事場が生じてきます。現行の宿泊業者もその規約にかなえば新たに作るもリニューアルも同じ指導と援助の対象となります。

その完成までには長い時間が掛かるでしょうが、その可能性は今準備するべきです。これらの店舗が増える事で宿泊形態もコンドミニアムと移行し分業が可能となります。長期滞在型に向かい島内への波及が目に見えてくる事になります。

14、特区と保養地

離島と内地の格差を無くす為に離島振興法が存在しました。

地域の特異を補う為に特区まで設け地方の活性化が促されております。

法があるために阻害される活性化を助けるために活用できる訳です。

保養型リゾート計画もその恩恵を受ける要素もあります。

まして私達住民が望む事になればそれを妨げる者は誰も存在しないのです。

勝本地区の観光

勝本地区は漁業中心の勝本と温泉の湯ノ本とで形成された、有る意味で言えば地場のおいがる壱岐らしい特徴を持った観光地と言えます。

最近訪れた観光客が必ず辰ノ島、イルカ池等を中心に人気が上がっています。

辰の島、若宮、名島の無人島と漁師町の風情は必ず旅行通に受ける事と思います。

湯ノ本においてもあと少しの観光客の増加があれば湯の町風情が整うと思います。

イルカ池

イルカ池の人気は年々広まり、大きな目玉として定着しております。

イルカ Therapie は大変な人気を取りながら、イルカ池の水質が悪化し、休業状態なのは大変残念な事です。その上イルカの確保が出来ないのは何をしても防ぐべきです。

法律が許さないとあきらめずその法をクリアーする方法があるはずで

「出来ない」のではなく「やろうとする意欲」が大切ではないでしょうか。

それと並んで近年イルカ池のメンテナが現在の状態では目一杯の所に来ているようです。「現状の状態での飼育の限界」でも有るようです。方法としては

1, 解決策は、蓄積した汚物の除去を容易に出来るような構造改革を施し、現在の状態を維持する。

2, 人工海への企画への変換。(自然を表現した水槽)

3, 全体的見直し、場所も含め検討しなおす。等の方法を検討する時でしょう。

①案はそのままその都度、汚物を除去する方法と底をコンクリートでひきつめ汚物の除去が作業し易いようにする方法が考えられます。

②案は一般の水族館同様、完全に人工海を作り循環か開放式循環との組み合わせを取り、温度調整も出来るようにする方法です。

③案は新たに場所を含め企画設計を見直す方法です。

イルカ池と特例債

新庁舎は軽々と言える物では有りませんが、勝本の利益をお考えとすれば、言わせて頂きます。新庁舎を新たに建てるには莫大な費用が掛かります。それを承知で望まれるなら結局は壱岐の特例債を身支度に費やす事になります。

活性化の為の資金を失う事になります。 特例債は身支度に使うべきではないはずです。身支度は当分継続する地方交付金内で調整するのが正論ではないでしょうか。

このような事は壱岐の衰退を促し、そうなると勝本も発展はしません。壱岐も勝本も良くならぬ結果が見えております、結局誰も良くなりません。

しかし新庁舎の約束があるのは問題です、我慢なら無い事でしょう。もしお耳をお貸し頂けるならその代りと言う事は出来ない事ですが、イルカ池とか辰の島整備に代替とはいかないものでしょうか。

この事は新庁舎より何倍も勝本の活性化になるはずです。

勝本も良くなりますが壱岐も良くなります。 このような連携理解は壱岐の将来に大きな良い影響を呼びます。 これこそが一本化の意識改革でないでしょうか。

辰ノ島

無人島辰ノ島の魅力は、本物の自然を思わせる魅力有る島であります。通の観光客に耐えうる要素を備えた島でも有ります。

手を付けてはいけない場所、言い換えれば下手に手を加えると価値が下がるからです。昔の賢人がキャンプ禁止をなされたお陰で今でも保たれた自然を生かすべきです。それを踏まえた上での保護開発を勧めます。

自然にマッチした遊歩道をもうけ景勝、名所を楽しめる方法を取るべきであります。その方法は自分たちで迷わず行ける道標を設け、ボランティア的ガイドの育成か出来ればと思います。 現在の辰の島入り口の防波堤の役割は機能をはたしているか、さして役に立って足っていないかの状況判断でしか意見は述べませんが、外側の防波堤はあまりにも自然を妨げていると思います。

そして現在の建物は全くマッチしない建物で有ると思います。このような場所の建物は、その建物がその自然を引き立たせる建物設計で有るべきです。

たとえば断崖にたつ西洋の古城のようにお互いが引き立たせる感覚が必要だと思います。 手を加えても自然を引き立たせるような結果を成すべきです。

一番の問題は島までのアクセスであります、その間の航路を楽しませる手段を考るなら、逆にその事が魅力の一つになると思われます。



今日までの壱岐政策と習慣には真反対に近い意見かも知れません。しかし現実に行政は何千億と言う巨費を費やし、住民は温厚崇拜で行政には寛大でした。その結果として実を結ばなかったのは今日が証明しております。それは時代の流れが、皆様にそのようにさせた事で批判などは出来る問題では有りません。しかしその現実に目をつむり、同じ繰り返しは絶対避けるべきではないでしょうか。「押して駄目なら引いてみよ」と今までと違った行動に賭けるのは、このまま流されるより有意義な事ではないでしょうか。 それはビジョンを重視する事です。

自然に手を加えるのは怖い。
何もしないが良いと良く言われる。
しかし自然は保護しなければいけないほど壊してしまった所もあります。
まして生活の為には止むおえぬ開発も生じます。
そこには自然とのバランスがとれた保護開発が必要になります。
手を加える場所とそのまま自然を残す場所の選定が大切でしょう。



参考写真

壱岐企画 代表者 田口 靖人

〒811-5202 長崎県壱岐郡石田町筒城仲触 1786

Tel 0920-44-5818 fax 0920-44-5686

観光保養村計画

タラソテラピー

製作日 (H15年3月)

これからの夏対策は紫外線対策が大きく問われます。
それは海水浴場からリゾートと移行しない限り、顧客から見捨てられるでしょう。
公園地区である、筒城浜、辰の島ですが公園課、農林課の物だけではありません。
壱岐の一番大切な宝なのです、縦割りで考えず連携した考えに追従するのも大切な事ではないでしょうか、それにも協働の精神が一番大切と思えます。